



大方あかつき館報

第32号  
2020年3月発行

# あかつき

第33回 上林暁文学館企画展

## 『文壇・作家論』

「上林の作品は地味で暗い」という人がいるが、果たしてそうだろうか？

そういう疑問を持ったとき、「それでは、上林暁という郷土の作家は、文壇の中でどのように評価されてきたのか。日本人であれば、文学にあまり関心のない人にも知られる三島由紀夫、川端康成、宮本輝、井伏鱒二などの文豪は、「上林文学」をどのように評価していたのかを紹介しながら考えてみました。

例えば、上林暁とは全く異なるタイプで洞察力の鋭い三島由紀夫は、「上林氏は、ハイカラな、あるひはハイカラ好みの作家」だと言っています。そして、日本文学を国際的に紹介してきたドナルド・キーン氏も三島と同じく、「上林暁の作品の中で、最も美しいものは恐らく『野』である。」と言います。

## 「作家論」

三島由紀夫

上林暁氏の作品を此度いろいろ読み返してみても、かねて世評に似ず上林氏は、ハイカラな、あるひはハイカラ好みの作家だ、と考へてゐた私の先見が、それほどを外れてゐないといふ印象を持った。それは必ずしも、明らかに西欧やロシアの短篇に倣つた「薔薇盗人」や、ジャン・パウルの散文を思はせる傑作「野」などのやうな作品ばかりでなく、もつ



みしま ゆきお  
三島由紀夫 (写真：日本近代文学館)  
(小説家)  
1925 (大正14) 年 - 1970 (昭和45) 年  
著作品：『仮面の告白』『潮騒』『金閣寺』  
『鏡子の家』『愛国』『豊饒の海』等

## 文壇・作家論

第33回 上林暁文学館企画展

と き：2020年1月11日(土) - 3月31日(火)  
と こ：大方あかつき館2F 上林暁文学館  
(休館日：本曜日・祝日・館内整理日)  
※開館内覧時間：11:24 - 17:27・2/28 - 3/27

「文士」という言葉が通用した時代、私小説家の上林暁は、文壇でどのように評価されていたのか。また、上林暁は文壇でどのような目で見つめていたのか。

「野」は今度読み返してみても、傑作と呼ぶに躊躇しない。  
三島由紀夫「作家論」



主催：上林暁文学館/〒789-1831 高知県幡豆郡黒瀬町入野6931-3 大方あかつき館内  
☎ 0880-43-2110/fax 0880-43-0222/E-mail akatsuki25@iw.kns.jp

(会期) 2020.1.7 ~ 2020.3.31

とも世帯じみた私小説にも、そこはかとなくハイカラな味が揺曳してゐるのを斥すのである。

「野」は今度読み返してみても、傑作と呼ぶに躊躇しない。この無内容、この無気力の、しかし張りつめた文章による充実した表現は、佐藤春夫氏の「田園の憂鬱」に匹敵し、あるひは深さに於て、あれを超えるものであらう。「野」を読みながら、私は幾度か、ジャン・パウルの「人間感情の常緑について」を思ひ起した。

それは故郷の父母の「有為の人物たれ」といふ期待を双肩に担つて上京しながら、都会生活からただ無気力のみを学び、都会生れの人間よりもさらに深いデカダンスへ落ちてゆくあの青年たち、明治以来現代にもなほ跡を絶たぬ青年たちの一人の手記である。しかしこのやうな衰弱の小説、一個のデカダンスを描いた作品でありながら、「野」は何といふ明

晰な詩に充ちてゐることであらう。抒述された衰弱が、文体と言語感覚の、何といふいきいきとした持続の動きによつて支へられてゐることであらう。

一人の未知の神学生に寄せた夢想の青春、実在の青春は世にもみじめな姿で自分に与へられてゐた。神学校の中の閑寂と雀の声、その雀の囁りがはじめは雀とわからず、神秘的な鳥のやうに思ひ込まうとしてゐたところで、作品が転調して、非現実な世界の影をにじみ出させるところは実に巧みである。神学校のベンチに坐りにゆく無一文の「私」の習慣、その門を出てからの精密きままる風景描写は、エッチングのやうな精緻で、これ又却つて非現実味をかもし出す。

(館長の余談)  
三島由紀夫の天才的な洞察力は文壇の誰もが認めることろだ。彼は、一見地味に思える上林文学の中に「ハイカラ」を感じとり、その風景描写に驚嘆している。

# 「本をつんだ小舟」

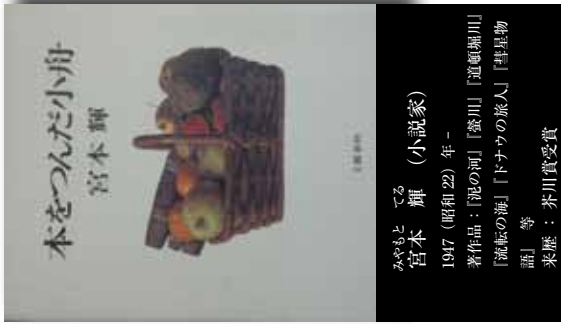
宮本 輝

失意に落ちた時に、

観念を超越した私小説の凄さが  
立ち上がってきた

二年ばかり前のこと 薄い霧のかか  
つた或る晩秋の日の午後 私は或る  
郊外電車のG駅へ通する廣いバス道  
路を歩いてゐた。

※「野」



この書き出しの一節には、何の技巧  
もてらもないようだが、やはり名文  
と言うしかない。これは、文章という  
もので苦労した人にはわかるだろう。  
何気ない文章というものは、そうあ  
おろそかに書けるものではない。そし  
て、上林睦の作品群は、文章と文学を  
同じ線上で味わう人たちだけに読まれ  
たのだと思う。

「ちちははの記」「小使小僧」「薔薇  
盗人」「聖ヨハネ病院にて」。どの名品  
にも、難しい言葉はまるで使われてい  
ない。難しい言い回しもない。

文学青年の多くも、一部の評論家も、  
「簡単に書く」ことの凄さを知らない。  
だから、書いている本人でさえその実  
体をつかみきれない観念をもとにして、  
一篇の小説にでっちあげるために難解  
な言々々々を並べたものなどは、ドブ  
に捨ててしまうほうがいいのだ。そん  
な小説をありがたがっている限り、永  
久に、人間の実相、人生の不思議、さ  
らには文学の秘密に手が届くはずはな

いのだから。

(中略)

「野」は、きつと失意の人に、いろん  
なことを教える小説なのであろう。そ  
のような人々の肩を、優しく叩いてく  
れる小説であらう。

(中略)

その作品に観念の遊びはなく、多く  
の、にせ者の作家が迷い込むインチキ  
臭さもなかった。彼の書くものは、一  
貫してすべてそうであつた。どこかに、  
明晰な一本の筋がおつている。本来  
の「私小説」とは、いつも〈非現実〉  
とは無縁のところにあつたように思う。

そこに、上林睦の並々ならぬ自信と  
頑固さよがらかがられる。ある凄さに  
憂鬱が加味され、しかも、ちらほらと  
ユーモアが立ち昇ってくる技巧を凝ら  
さない文章……

そのような文章を書きつづけた人が、  
心優しく善良で勤勉であつただけと  
は思えないではないか。

# 「小説の研究」

川端 康成

上林睦氏は昭和八年頃、一種の抒情的  
短篇作家として出発した。その後病気を  
したりして、筆をとらぬ期間も一二年あ  
つたが、近年次第にその境地は円熟大成  
し、私小説に一種独自の風格を築き上げ、  
ゆるぎのない作家道をうち立てた。その  
作風は初期の抒情味を生かしてはゐるが、  
更に人間と生活についての素朴にして繊  
細な反省をとらへてゐるのが特色である。  
初期の作品集には『薔薇盗人』があり、  
近年の著作としては『野』『花の精』等  
が挙げられる。

(昭和十七年四月)



# 「上野櫻木町」

上林 睦

「改造」に書いてもらつた川端さんの作品  
は、「浅草紅團」の続編のほかに、「水晶  
幻想」「鏡」「落葉」「鬼熊の死と師子」「慰  
霊歌」「二十歳」「禽獣」などである。

(中略)

このうちで、一番傑作であり、書いてもら  
ふのに苦心したのは、「禽獣」(改造・昭和  
八年七月号)である。

その月も夕切が迫つて来た。毎日出張校  
正に通ひ、校了も間近になつた。私は毎日  
出社前に、川端さんの家へ行つた。私の住  
居が胸達であつたから、鶯谷から行くと、  
川端家は比較的便利で、近かつた。私が行  
く度に、原稿は一枚も出来てゐない。

「明日はきつと」と言つてかへるが、その  
翌の日になつてみると、約束の原稿はでき  
ていない。

(中略)

一日延ばしに夕切を延ばしてゐたが、明  
日はよいよ校了でギリギリの夕切といふ  
日、「明日きつとまぢがひなくお願ひしま  
す」と念を押して、私は川端邸を辞した。

奥さんも、もう一日だけ待つてくださ  
いと懇願した。

翌る朝、私は薄氷を踏むやうな気持ち  
で川端邸を訪ねた。原稿は出来てゐたので  
ある。一晩で出来てゐたのである。「文  
学的自叙伝」の中に、「私が第一行を起  
すのは、絶体絶命のあきらめの果てであ  
る。つまり、よいものを書きたいと思  
ひを、あきらめ棄ててかかるのである」と  
川端さんは書いてゐるが、それを裏地に  
やつたのである。それは三十二・三枚  
の「禽獣」といふ作品であつた。虚無の  
風が胸の中を吹き抜けて行くやうな作品  
で、多くの人に感銘を与へた。川端さん  
の代表作の一つに数へられてゐる。

その後、私が最後に行つた時のことを、  
奥さんが話してくれたことがある。あの  
とき奥さんが出来て、もう一日待つて  
くれと交渉してゐたとき、川端さんは奥  
さんの脇の障子のかげに坐つて、両手を  
合せて、私を拜んでゐたさうであつた。  
その拜礼が通して、私はもう一日待つと  
言つたのである。

(昭和四十七年『文學七頁』)

# 「草にすわる」

三浦 哲郎

私は、学生のころ、六人の仲間たちといさな同人雑誌を作っていたが、そのころ仲間同士で上林文学を話題にするとき、私たちはまだいちどもお目にかかったことのない作者のことを、敬愛の念からさも親しげに「上林さん、上林さん。」とよんでいた。(中略)

志賀直哉は、志賀直哉である。  
太宰治は、太宰である。織田作之助は、織田作である。けれども、上林

さんは、上林氏でもなければ、上林氏でもなく、やはり上林さんなのであった。(中略)

人それぞれに読み方があるが、私の仲間のひとりなど、いちども伺ったことのない上林さんのお宅の内部の見取図を、すらすらと描いてみせて、私たちをびつくりさせたりした。といつても、勿論彼は上林さんのお宅に忍びこんできたわけではなく、作品から得た知識を集めて図面をひいたのだが、彼の見取図によれば、上林さんの仕事部屋はあまりひろくない庭に面した、床の間のついた六畳間で、机にむかつて坐ると、障子に

はまっている硝子越しに、まばらな庭木と板塀とがみえるというところになっていた。しかし、私がかつ雑誌のグラビアでみ

た上林さんの書齋は、節々な板の間で、ぎっしりつまった本棚と、抽出しのついたごく普通の勉強机とがおいてあった。この厳しさと清潔さを痛いほど感じさせる書齋のグラビア写真は、私にはひとつの衝撃で、それ以後、私は上林さんを読むとき、(甘ったれてはいけないぞ)と自分をいましめながら読むようになった。

(平成十三年九月) 上林氏文集大4巻『月報』

# 「上林さんの目 — 上林氏追悼」

三浦 哲郎

上林さんの作品では、とりわけ『小説小僧』と『野』に打たれた。この二つの作品を読むといつもきまつて涙が出た。小説を読んで涙ぐむというのは、私には新鮮な体験であった。

その後、私は肉親に不都合なことがあつて苦境に陥り、うちおたれて郷里へ引き揚げたりしたが、絶望することもなく常に再起を念じていられたのは、上林さんをよく読んでいたおかげだと思う。上林さんを読むと、いつも慰めや励ましと一緒に自分の運命を切り開く勇気を与えられた。

(昭和五十五年) 『露伴十一月号』



みづら 三浦 哲郎 (小説家)  
1931 (昭和6) 年 - 2010 (平成22) 年  
著: 作品: 『忍ぶ川』『獅子ひとり』『エタとふしぎな仲間たち』『おろおろ草紙』『少年讃歌』等  
来歴: 芥川賞受賞・芥川賞選考委員

# 海揚り

## 「上林 暁」

井伏 鱒二

上林君は昭和二十七年に軽い脳出血で倒れ、十年後に近くの銭湯で二度目の発作を起した。退院後、左手と口述筆記で最初に書き上げたのが「白い屋形船」であつた。四十八年には「ブロンズ的首」を発表し、入院退院を繰返した末、今年七月二十一日に最後の入院

をしたと云つてある。

上林君の作品は、二度目に発病してから後のものが、一段と見事である。私は雑誌で読みながら、そのつとさう思った。発病すると、こんなにも作品が良くなるものか。覚悟が出来たといふわけだ。それなら俺も発病してやらう。ふと一瞬、さう思ったことがあつた。

敗戦後、昭和二十七八年頃までは、中央線沿線の文筆業者は殆どみんな飲助になつてゐた。大きな磁石か何かにかけてられたやうに、阿佐ヶ谷の駅前、荻窪の

駅前、新宿のハモニカ横丁などに、いそいそとして飲みに出かけてゐた。世の風潮といふものであつたらう。誰が先に飲助としての足を洗ふかが問題で、後から思へば賢い人ほど先に足を洗つたやうであつた。私なんか今たに足を洗つたとは云ひかねる。

前述の「週刊新潮」に、「毎夕のように、杉並区天沼の「酒屋」からステッキをつき、ペチャンコの鳥打帽をかぶつた上林さんは、阿佐ヶ谷界隈を飲み歩いた。」と云つてある。事妻その通りだが、上林君は他の文筆業者たちと違つたところが一つあつた。第一回目に発病してから後は、「酒は一本ぐらゐで止すべきです。一本だけならよろしいでせう」と医者には云はれたので、素直なことの好きなこの人は医者の云ふ通りにした。阿佐ヶ谷南口の飲屋で一本飲んで、その帰りに北口の飲屋で一本飲んだ。一本の握は正しく守られたのである。阿佐ヶ谷方面を暫く遠慮する場合には、荻窪南口の飲屋で一本飲み、北口で一本飲んだ。翌日、またその店に来る理由を懐けるため、お銚子一本の代金を借りて翌日私に行つて一本飲んだ。しんから酒を好いてみたやうだ。

(昭和五十五年) 『すばる 十一月号』



いぶせ 井伏 鱒二 (小説家) (写真: 日本近代文学館)  
1898 (明治31) 年 - 1993 (平成5) 年  
著: 作品: 『ジョン万次郎漂流記』『黒い雨』『本日休診』『早稲田の森』『駅前旅館』等  
来歴: 直木賞受賞・文化勳章受賞



# 上林文学の故郷で

大原 富枝

上林さんをはじめ阿佐ヶ谷のお宅にお訪ねしたのは、戦争が終わったばかりの昭和二十年の九月もまだはじめて

であった。東京は焼け野原で瓦礫の山がいろいろ有様で、日が落ちると真暗でどこでもうごもごおそぎが鳴っていた。

上林さんは戦争中に入院していた夫人を死なせ、家族は土佐に疎開させて一人東京にいて、このときもまた家族は帰って来なかった。

食糧事情の悪い苦しい時期であった。お互いに病せ細っていた。上林さんの

洗いぎらしたお茶がひらひらと何か淋しいほど肉の落ちた中味を感じさせた。

上林さんはすでに「名月記」などの名作があって、私はまだ連つたとはなくてもこの同郷の先輩を、文学の上でどこか心の拠りどころとしていた。(中略)

昭和三十六年の春、三月の終りから四月のはじめにかけていよいよ高知へ講演にいった。(中略)

「あの坂が『春の坂』の坂ですよ……」と教えた。ゆるやかな坂道が陽を受けてのどかにそこにあった。カーブの多い道で車はゆくり走る。私はそこを登ってゆくあの、春の坂の女主人公の姿を想った。夫の意志に従って、夫を残して、

いわば夫の身代りに東京へ勉強に出てゆくあの女主人公が、いまにもその坂を下りてきそうなおんな幻想を誘う。その坂道の持っている抒情が私を捉えた。

(平成十三年四月)

上林暁全集十一『月報』

# 「思い出すことども」

大原 富枝

日本固有といわれる私小説の分野で終始仕事をしてこれた人であったが、作品には実に周到な文芸的処理が行われていて、その巧妙さを言うのにある人は老獪であるときえ言だ。事実をそのまま描くのが私小説ではないことを、上林さんは生涯かけて証明したと言える。至極当然のこと、事実そのままが文芸作品ではあり得ないことをわかってもらうにも、一人の作家の生涯を費さなければならなかった。日本という国の風土にはそのように隠微な、困難な生理がある。

私小説の醸成というか、熟成の過程の、なるほど老獪と言ってもいほどの微妙な営為については、西欧風本格小説の営為、手法からは推察しにくい想像力の働きのあつて、あるいは日本の風土と密着した必然かも知れない。割合近いところで作家上林暁を見ていたことと郷土を同じくすることなどで、その熟成の微妙さを私は少しは知つたように思う。作家の生い育つた土壌とそれが作つた人柄とが重要な酵母の役割をしているものように思うのである。上林文学には非常に熱心な固定読者があつて、その中には西欧本格小説の毒をのり超えてきたインテリも決して少なくないはずである。

(昭和五十五年十二月) 『俳誌』十二月号



とおほら 富枝 (小説家)  
1912 (大正元) 年 - 2000 (平成12) 年  
著作品: 『腕と女』『春の坂』『土佐一作家の加藤』『ベンガルの恋恋』等  
来歴: 高知県本山町出身・芸術院会員

# 近代日本人の発想の諸形式

伊藤 整

## 「昭和文学の死滅したものと生きてゐるもの」

私と同時代者には多くのうまい作家がいた。そして、うまい作家だと思われた人から順に通俗作家になつて行つた、という印象を、私は消しがたく持っている。うまい、ということは何ものでもない、いかに下手であつて、そして、古風な言葉だが、マゴコロを失わな

いでいるかが、文学者の本当の形だ、と私は書いたことがある。私は前に、上林暁は才能がないが、素直な人であつた、そして素直であることが才能を持つよりも大切だと書いた。その時、上林暁は怒つたようであつた。今では怒らないだろう。才能と言われるところのものほど危いものはない。多くの場合、マゴコロを失つてゐることを隠す方法、またはマゴコロの苦しさをゴマカス方法が、文学作家においては、うまいとか技術がすぐれているとかと見られるところのものである。

(昭和二十九年十月)

## 青年上林暁

伊藤 整

多分その時から私は上林君を知つたのである。上林君はハンチングをかぶり、丸顔でにこにこして、実に明るい、屈託のない感じを与へる人であつた。当時三十歳ぐらゐであつたらう。「風車」の人たちは、それぞれにちがつた意味において、

つつめた文学的な気持を漂はせてゐた。

その中で、上林君が我々に見せてゐた顔は、快活で、さりげなく、少年のやうな素直さがあり、それが多忙で機敏な動きを必要とするジャーナリズムの仕事と結びついていたから、はつきりと違ふところが目立つた。スポーツマンでないのに、言葉づかひ、動作がきびきびしてゐて、物にこだはらなかつた。「手偏に幼いをやめよう」と言ひだしたのはたしか上林君であつたらう。「拗ねる」といふ若い時代の傾向が我々の中にあつたのだ。

「風車」の人々は集ると議論を戦はし、鋭い批評を投げつけるので、私はその中でしばしば閉口し、この人々と太刀打ちのできるのには瀬沼君ぐらゐであつた。上林君は、さういふ論争や相互批判にかかずらなかつた。一人だけ大人のやうでもあり、また議論を好まぬ人柄とも見えた。にこやかに笑つて議論以外のことを言ひ、相手にならなかつた。

(昭和三十八年) 『春夏秋冬春夏の号』



せいとう 伊藤 (小説家) (写真: 日本近代文学館)  
1905 (明治38) 年 - 1969 (昭和44) 年  
著作品: 『得能五郎の生涯と意見』『チャタレイ夫人の恋人』『祀謡』『妻容』『日本文壇史』等  
来歴: 菊池寛賞受賞・日本芸術院会員

# 敗戦の年の秋のある日のこと

田宮 虎彦

上林さんの思い出で、私の心に強く残っているのは、敗戦の年の秋のある日の上林さんのことである。

その日、私は久しぶりに上林さんのお宅をおたずねした。当時の私たち日本人が、敗戦という事態をどのように受けとめていたかは、一人一人、それぞれに違っていたであろうが、私には、長かった軍国主義の強圧から解放されたことで、明るい未来が青空のようにひろがっているように思われていた。私は、躍り出したほどにはずんだ気持ちで、上林さんのお宅をおたずねしたのである。私は、戦争が終わったことを喜ばない人などいるはずはないと思っていたのだが、玄関に出て坐り下された上林さ

んは、思わずあとと思をのむような上林さんであった。

敗戦の日からまだ間もなかったその頃、東京の町には至るところに、見ただけで栄養失調とわかる人たちがいた。生きといる人とは思えないような人たちがあつたが、私の前に立つた上林さんは、まきれもなくその一人であった。(中略)

書くまじきもないのだが、上林さんは明治以後の日本の文学が日本社会の特殊性の軌の中に結集した私小説の、最後の代表的作家と言えらるであろう。私が、その敗戦直後の秋の日の上林さんの思い出を、ここに書いたのは、その日の上林さんの姿が、私小説のもっとも本質的なありようを象徴しているように思えるからである。(中略)

小説は、人間とは何かを追求する。本格小説も私小説も、そのことに変わりはない。人間の真のあり方を追求する時、「嘘を書かない」ことは、何も私小説にだけ要求されることではないのである。本格小説にせよ、私小説にせよ、真実を追求しないかぎり、そしてそれを作品化しないかぎり、小説は成り立たない。ただ私小説の場合は、作者が作品に密着しているために、凡庸に私小説が語られる時、現実の外側、つまり低い次元で「嘘を書かない」ということが言われがちであるのだが、上林さんが「嘘を書かない」と言った時、上林さんは現実の外側のレベルで言っていたのではないのである。

(昭和五十五年『新潮十一月号』)



## 「あたたかい心」 田宮 虎彦

浜本浩さんや田岡典夫さんが、上林さんを慰めるために、やがて元氣にかえられるであろう上林さんが気ままに書ける雑誌を出そうと言い出され、私たちは「南風」という雑誌を持つことになった。高知県に縁を持つ文化人

に同人になつてもらつたのだが、刊行の趣旨を伝えると、みなすぐころよく応じてくれた。これは、やはり、上林さんのあたたかい人柄を誰も知っていたからであつたに違いない。

(平成十三年『上林全集第十九巻(月鑑)』)

# 「追悼対談私小説のながれ」 (尾崎一雄と川崎長太郎の対談)

上林君の『白い屋形船』にはギョとした。あれは、健康な小説家が自分の幻想力とか想像力とかいうものを極度に発揮してつくつたものではなく、本人が渦中に入つた。だから、操作というものなしに出てきた作品だ。これには、ほくらみたいな者がちよつと近寄れないんだ。親類筋だから俺だつてあつてもの書けるだろうと思つてやつたで、これは嘘になつてしまふ。だから、あれを書いたときの作者の状態というのは、健康上から言うと非常に危なかつたわけだ。しかし、それをおして書いたから、意識しないあいつ

う効果が出ちやつた。そんなものはね、ほくらできませんよ。だから、あれにはカブトを脱いだな。あれは上林君の作品としては、何と云つても一番こゝろの作品だ。

(昭和五十五年)『灘 十一月号』

## 「上林暁追想」 尾崎 一雄

上林君は、先づ夫人の病氣、やがては自身のそれにさいなまれて、人生を司る何者かから可なり冷遇されたにもかかはらず、ひがみや恨みに陥らず、その精神はつねに向日性を示した。甘さによつてさうなるのではなく、見るものはしっかりと見た上でのことだから、僕いと言はざるを得ない。私が上林君に捧げる敬意の最高なるものは、かつてその点にある。凡と見えて非凡の人であつた。

(昭和五十五年)『群像十一月号』



# 〈私小説作家〉と「文士の魂」 — 「あの」車谷長吉からの、暁への畏敬の念 —

## 1 一概に〈私小説〉〈私小説作家〉というけれど

### ① 世にいう〈私小説〉と作家を眺めてみると

\* 日本自然主義を誕生させた島崎藤村、田山花袋をはじめとして

- ・ 岩野泡鳴、近松秋江……………↓
- ・ 葛西善藏……………↓
- ・ 川崎長太郎……………↓
- ・ 志賀直哉……………↓

▶ 自然主義全盛時の告白的文芸思潮に芥川龍之介の真つ向からの「反抗」

### ② 〈私小説作家〉上林暁を〈郷土の作家〉として得た方々は、幸せか？

- \* 清く美しい小説を書きたい」（私の文学的計画）
- \* 晩年、一句の誕生、判読に三時間をかけての執念（井伏鱒二『文士の』風貌』での指摘）
- \* その死（1980）に際して「最後の〈私小説作家〉」と評された上林暁

## 2 「あの」車谷長吉登場の戦慄

### ① 「死滅したかと思われていた〈私小説〉」（参考：野家 啓「朝日新聞」2019.7.31）

\* 車谷長吉『鹽壺の匙』……………↓「死滅したかと思われていた「私小説」を平成の世に蘇らせた作品集。  
 ペン先をおのれの臟腑に突き立て、ほとぼる血糊で書き上げた「生前の遺稿」は、その毒で都会人の  
 心胆を戦慄せしめずにはおかない。」

- ・ 作品世界の「毒」と「戦慄」

### ② 車谷長吉

\* 第119回直木賞受賞「赤目四十八瀧心中未遂」（平10・7 1998）

- ・ 直木賞選考委員の高い評価と平成七年には『漂流物』で芥川賞候補にもノミネート
- ↓特に、井上ひさしの激賞評
- ↓落選6名のうち、なかにし礼はじめ5名が後々直木賞受賞者という高レベル選考

▶ 小説「変」で考える車谷文芸……………↓直木賞受賞第一作として（別冊 文藝春秋 1998・秋号）

- ・ 語彙と文体
- ・ 「その毒」と評された文芸的資質

\* 作家として、人、人生への視線と向き合い

- ・ 大先輩水上勉へのインタビューと〈私小説作家〉水上の応答の姿勢

## 3 峻烈を極める「あの」車谷長吉の存在感と文芸観

### ① 文芸への関わり、人間関係への思い、そしてその表現

\* 先述の「変」はじめ個々の作家や作品人物評もまた手厳しい

### ② 〈私小説〉としての〈虚実〉〈虚点〉への思い入れ

▶ 島崎藤村にはそれが無い！

- ……………↓藤村の故郷での講演で

### ③ ささやかなエピソードですが

- ……………↓『上林暁研究』刊行時に……

## 4 どのような車谷長吉の上林暁観は？

### ① 「これこそが文士の魂である」

### ② そして車谷長吉は、自らの「文士の魂」をどのように自覚しているのか？

## 二〇一九年度 第3回上林暁文学館文学講座

超大型台風19号襲来で近畿圏は朝から航空機は全便欠航、新幹線は午前十時で運休路線も出るといいう危機に見舞われたが、ここ土佐の地は穏やかで、文学講座は何事もない雰囲気の中で開催された。ただ、講師吉村先生は大阪からのご来高で関係者は冷や冷やの一場面も。

さて、講座の報告であるが、紙数の都合で、下記(前頁6頁)の、当日配布された講座構成表「目次」を参考にして、講座の要点を以下に記して内容をお伝えしておきたい。



(講師) 吉村 稠 先生



車谷長吉著書『文士の魂』

### 〇〈私小説作家〉と「文士の魂」 ―「あの」車谷長吉からの、暁への畏敬の念―

講師 吉村 稠 (園田学園女子大学名誉教授)

#### 1 一概に〈私小説〉〈私小説作家〉というけれど

この項で、藤村、花袋から生み出された日本自然主義誕生の経緯と、文芸史上の名だたる私小説作家数名を取り上げその作品の多くが「貧困」「痴情」「葛藤」を描出しているのに比して、上林暁(以下暁と)は、「清く美しい小説を書きたい」(私の文学的計画)の文芸観を所持した私小説作家であり、彼の死は「最後の〈私小説作家〉」と。

#### 2 「あの」車谷長吉登場の戦慄

車谷長吉『塩霊の匙』を「死滅したかと思われていた「私小説」を平成の世に甦らせた作品集」と評した野家啓一氏の言葉を軸にして、私小説作家として厳しい文学観と作家態度に徹した車谷長吉を詳しく説明。

#### 3 峻烈を極める「あの」車谷長吉の存在感と文芸観

車谷長吉の小説「変」の紹介と彼の私小説へのこだわりや論争的姿勢を紹介しつつ、車谷が小説作法の上で重要と考える「虚点」について説明が資料によつてなされた。そしてその観点に立つての車谷の文芸観の指摘が紹介された。それは、日本自然主義、そして〈私小説〉生みの親ともいえる文豪島崎藤村の郷里で、「島崎藤村の小説の文章の中には、こういう「虚点」が「ない」と断じた、峻烈を極めた講演である。

#### 4 かような車谷長吉の上林暁への畏敬の念

暁の実妹徳廣睦子『兄の左手』は、生活の困窮、親兄弟、妻、子供たちを迷惑や不遇の境涯に立たせて、彼女もさきざき苦勞させられた兄暁が、なお「七度生まれかわったとしても、文学をやりたい」と、言ったことを突き放して描出している。

が、「あの」車谷長吉は、この暁の姿を「これが文士の魂である」と述べている。

これは、車谷長吉から上林暁への称賛、畏敬の念であるともいえる。(以上)



# 第30回あかつき賞入賞者決まる

第30回あかつき賞表彰式は、「新型コロナウイルス」対策の影響で中止となりましたが、審査の結果、次のみなさんが入賞されました。

**小学一年の部** 矢野 愛梨 (田ノ口小学校)

(題名) 「かなちゃんぐうちに帰ってきた」

**小学二年の部** 松本 悠生 (田ノ口小学校)

(題名) 「だいきくんとわくわくサンデー」

**小学三年の部** 今西 遥斗 (拳ノ川小学校)

(題名) 「さようなら」

**小学四年の部** 森 凜花 (拳ノ川小学校)

(題名) 「おばあちゃんのために」

**小学五年の部** 秋田 陽向 (田ノ口小学校)

(題名) 「受けつぎたい 黒砂糖作り」

**小学六年の部** 宮上 祥鳳 (三浦小学校)

(題名) 「百人一首大会」

**中学二年の部** 浜田 佳和 (佐賀中学校)

(題名) 「両国のかけ橋に」

(指導教員) 中野 耕造

(指導教員) 秋田 喜俊

(指導教員) 佐賀中学校

(指導教員) 中野 耕造

(指導教員) 中野 耕造

(指導教員) 中野 耕造

## 審査寸評

小学一年の部の「かなちゃんぐうちに帰ってきた」は、「久しぶりにこんないい作品を読んだ」と審査員を唸らせた。小さく生まれた妹のかなちゃん成長や、作者と暖かい家族の雰囲気がとてもよく伝わってきます。

小学二年の部の「だいきくんとわくわくサンデー」は、タイトルからしてとても楽しい作品です。仲良し二人の元気な姿が目には浮かぶようでした。

小学三年の部の「さようなら」は、モンシロチョウのとても詳しい観察記録、「ニューたん」「緑くん」と名前をつけたので、最後に飛び立つ別れが切なくなってしまう気持ちがよく伝わってきます。

小学四年の部の「おばあちゃんのために」は、少し体調を崩して、元気がないおばあちゃんを心配している作者の優しい気持ちが伝わってきます。小学五年の部の「受けつぎたい 黒砂糖作り」は、黒潮町の特産品「黒砂糖」の魅力と生産の大変さをよく伝えていきます。作者自身が経験しているからこそ、このように書けるのでしょう。町にとっては大変頼もしい内容でした。

小学六年の部の「百人一首大会」は、校内の百人一首大会の熱戦や緊張感が、まるで実況中継を聞くように伝わってきました。最後まで「勝ちたい」という強い気持ちを持つことが大切ですね。中学二年の部「両国のかけ橋に」は、町に伝わる「朝鮮女の墓」の話や、韓国でのホームステイ体験などを通して、今はなんとなくしっくりいっていい。ない日本と韓国の交流の将来を考える秀作でした。

## 第34回上林暁文学館企画展

# 「拝啓 上林 暁様」

徳広巖城から上林暁に変わり、その後も苦難の創作活動を続け、日本近代文学史に大きな足跡を残した上林暁は、その時々、どのような人と交流し、刺激を受け、あるいは与え、そして支ええられてきたのだろうか。彼が残した数々の書簡から、作品の中では見えない部分に迫って見たいと思います。

日時…2020年

4月10日(金)から6月30日(火)

会場…大方あかつき館二階

「上林暁文学館」

その他…入場無料

とき…2020年4月10日(金)～6月30日(火)  
ところ…大方あかつき館2F 上林暁文学館  
(文学館休館日:本曜日・4/24・4/29・5/29・6/29)

書簡でよみがえる

上林暁の生きた時代

みなさん、  
おかわりないでしょうか。  
私は元気です。  
上林 暁



第三十四回「上林暁文学館企画展」  
拝啓 上林 暁様

主催:上林暁文学館  
〒789-1931 高知県幡多郡黒潮町入野69331-13  
黒潮町入野69331-13 大方あかつき館内  
☎0880-43-2110  
fax:0880-43-6222  
E-mail:akatsuki256@iwk.nc.jp



上林暁文学のふるさと

あかつき

第32号

大方あかつき館

〒789-1931 高知県幡多郡黒潮町入野69331-13  
TEL:0880-43-2110 FAX:0880-43-0222